

中高生とともに差別と闘う

親猫子猫

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



不自然な町

夏も終わりに近づいたところ。まだ暗い早朝に、二階の寝室の開けたガラス戸から朝のひんやりした空気が流れ込んで目を覚ました。まだ早いなあ、と思い目を閉じようとするのですが、なぜか意識がはつきりとして眠りにつけません。どうしてだろう、と頑張るのですが、どうしても寝つけませんでした。するとしばらくして、ガラス戸の向こう側のベランダから、トタトタトタトタと物音。ん？と耳を澄ますと、しばらくしてまた、トタトタトタトタ。何かが走るような不気味な音に聞き耳を立てると、なおいつそう寝つけなくなってしまう。よくよく聞いていると、トタ、の合間に、シヤツ、という爪が擦れたような音。猫？

そういえば、近所に猫の親子がいたことを思い出します。生まれたてのときは、確か小さな子猫が三匹いました。そんな姿を見るたび、老いた母は、「放し飼いにしている」「勝手にうちの敷地に入ってきて」と愚痴っていました。

私が子どものころ、お魚くわえたドラ猫はいませんでした。野良猫はいました。屋根裏ではネズミが運動会をしていましたし、野良犬もいました。ときに野良犬は恐ろしいほどの群れをつくっていることもありましたが、ところが、最近はその面で見かけません。危険であるとか、衛生面で駆除が進んだ結果かなと思えます。それはそれで安心といえれば安心

なのですが、どこか町が不自然な気がしてなりません。いても、駆除のしようがないカラスや雀などの鳥獣くらいです。野良猫も少なくなりました。だから逆に妙に、その猫の親子にどこか親しみを感じていたのか、よく知りませんでした。

親猫子猫

私は音の主を確かめたく思い、布団に寝転んだまま考え始めました。ベランダに出てみればいいだけのことですが、そんな不躰な行為はしたくありませんでした。

さで、どうしたものか。とにかく何匹いて、どんな行動をするのか見てみたいと思うようになりました。そこで、器にミルクを入れて、ベランダの端にそっと置いてみることに。暗がりの中、適当な器を探し、冷蔵庫のミルクをタップと注ぎ入れます。そのまま部屋を歩き、ベランダの隅のガラス戸を開けて、そっと器を置きます。ついでに、ベランダの状況を確かめに顔を突き出すと、黒い影が一つ。あまりの暗さに、それが何なのか判別ができません。仕方なくガラス戸を開め、部屋の中でじっと見ていると、黒い影が動き、近づいてきます。やはり猫です。匂いを嗅ぎつけてか、器のミルクを飲み始めました。しかし、何度か舐めるたびに、こちらを伺います。暗くて目が合っているのかどうかすら分かりませんが、警戒しつつ、また舐めはじめ、しばらくするとまた

た警戒してこちらを伺います。幾度か繰り返していると、背後から別の黒い影がもう一つ。少し小さめの影が器に近づき、舐め始めました。どうやら先のが親猫で、後のが子猫のようでした。子猫は警戒することもせず、ひたすらミルクに夢中になりました。そんな姿を確認して、私は暗がりの部屋を後にしました。確か三匹いたはずの子猫。残りの二匹はどうなったのか。親元を離れたのか、厳しい環境の中で淘汰されたのか。

不思議なもので、そのあと、トタトタとベランダを走り回る音は、ピタリとなくなりました。少し明るくなり始めたところに器を見に行くと、一滴も残すことなく、洗ったかのよう綺麗にたいらげていました。ベランダの反対側を見ると、落ち着いたかのように二つの黒い影が朝日に照らされていました。

さて、明日はどうしたものか。これからどうしたものか。餌づけすることが良くないことは分かっているつもりではあるのですが…。

二〇二二夏の出来事

そんな朝、次のようなLINEが届いていることに気づきました。

*

いま読ませてもらいました。かなり読みやすかったです。これ、自分のことなんですよ。ボクのこと誰かが何か気づくのであれば、全然大丈夫です。

一週間前くらいかな。娘の口から「パパ、狭山事件って何？」って訊か

れました。どこでそんな情報を調べて考えましたが、やはりSNSですね。中学生集会で部落差別のことを伝えてたので、スツと狭山事件と部落差別について大まかに説明しました。最後に、生まれた場所で差別されるっておかしいだろ？って言葉も残して。こうやって勝手に情報を入れてくるんだから、部落差別知ってる親は子どもに何で説明するんでしよう。いろいろ考えちゃいました。

昨日、小学校の奉仕作業があり、校長先生に会う機会もあったので、中学生集会の記録をプリントアウトして持っていました。子どもも奉仕作業に連れて行ったのですが、校長先生に資料渡す前に校長先生が娘にハグ。「行つとったんやなあ」って笑顔で接してくれて。先生も気にしてたみたいで、夏休みだから連絡もとれず、みたくて。作業もあつたので長々話はできませんでしたが、「狭山事件って言葉が娘から出てね」って言うのと、「子どもの口から出るのか」って、考え込むような場面もありましたが、ずっと笑顔で子どもに対応する先生には感謝しかりませんでした。

二学期が始まると、いろんな展開があるかもしれません。ハードルたくさん並べてしまったので、一つ一つ超えていこうと思います。先生もつきあってくださいね。

*

このLINEの意図するところを、この夏最大の出来事として、記していきたいと思えます。